



北海道 国際理解教育研究協議会



会報 第56号



会長 真木 孝輝



事務局長 池田 幸一



「第24回北海道国際理解教育研究大会を終えて」



第24回北海道国際理解教育研究大会・上川旭川大会
実行委員長 南 信義

第24回北海道国際理解教育研究大会・上川旭川大会が全道から約330名の参加者を迎えて、盛大に行われましたことを皆さまと共に喜び合いたいと思います。そして、本大会を支えて頂いた多くの方々へ感謝致します。概括的に今次大会の特徴的な事柄を述べてみたい

と思います。

- (1) 子ども達の学ぶ姿を前面に出すために、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学とそれらの異種学校間の交流を図った授業も加えて、合計10の公開授業が設定され、多くの反響を得ました。
- (2) 研究の視点や研究内容を明確にし、公開授業に向けて『子ども達の学ぶ姿』を通じた実践的な研究が行われました。特に、道の研究部と連携を密にして、研究主題と副主題の関連を話し合い、実践に結びつけることができました。
- (3) 授業協力者として地域人材、AT、ALT、アイヌの方々、海外日本人学校派遣教員経験者など、外部の人材を積極的に活用し、専門的な知識や異なる文化に直接触れる授業づくりに向けた創意工夫が多く見られました。
- (4) 参加者が多くの授業を参観できるように、公開授業時間の設定を工夫しました。それによって、公開授業のほとんどを参観でき、子どもの発達過程を感じながら授業を見ることができたので大変良かったという声が多く聞かれました。
- (5) 提言発表希望者が多く、1テーマで2分科会を設定する運営が求められる状況でした。全道各地域の国際理解教育の研究が盛んに進められている証拠とも言えるでしょう。
- (6) 道の事務局や研究部と連携して、「今次研究大会の研究内容」と「全道各地の研究実践」の結び付きが深まるように、地区研究部長による『授業協力者体制』を今回初めて試行しました。授業協力者の組織の在り方、協力の仕方、活動内容など、今後工夫すべき課題を克服して意義ある体制づくりが望まれます。

このように、今年度の上川・旭川大会から多くの研究実践が発信されました。今後は、この実績の上に『何を、どのように積み重ねるか』について、みんなでアイディアを出し合って、更なる国際理解教育の実践的な研究推進に一層努力しようではありませんか。

幼稚園から大学までの授業公開

第24回北海道国際理解教育研究大会上川旭川大会

大会主題

地球を見つめ、自分を見つめ、
未来を切り拓く児童・生徒の育成

～ 自ら問いかけ、共に生きる道を求めて ～

9月11日(木)・12日(金)に旭川市において、第24回北海道国際理解教育研究大会・上川旭川大会が行われました。1日目は、トーヨーホテル・旭川パレスホテルで開会式並びに課題別分科会が行われました。課題別分科会は、研究発表をしてくださる方々により多くの時間を使っていたということと、話し合いの時間を多くとることによってたくさんの方に意見をいただくという考えから4分科会をさらにA部会・B部会と分けて開催され、参会者の熱心な討議が行われました。2日目は、藤女子高校を会場として幼稚園から大学までの10の授業が公開されました。特に今回は、参加して下さった方々にたくさんの授業を参観していただくこと、会場を一つの学校し、授業時間をずらすことでより多くの授業を参観できるという日程でした。また、2日目の午後は、授業別分科会のために時間をたっぷりと取っていたため多くの会場で討議が熱心に行われるとともに深まった話し合いになったようでした。

大会主題『地球を見つめ、自分を見つめ、未来を切り開く児童・生徒の育成』でスタートした第7次研究も2年目に入り、「国際理解教育における評価のあり方」、「小学校における英語活動」等解決しなければならない課題を中心に研究が進められているところである。

大会1日目の午前中には、北海道国際理解教育研究協議会の理事会と各地区の研究担当者会議が行われました。理事会の中では、今年度前期の各部の活動報告が行われました。また、8月に行われた全国大会(東京大会)へ参加した中村道研究部長より、大会での発表内容と大会の報告がありました。

昨年に引き続き、ご来賓として大会に出席された全海研の滝多賀雄副会長からは、北海道の研究大会は、授業を核に実施され、全国的にも注目されており、全海研としても大きな期待を寄せているとお話がありました。

次ページからは、大会に参加できなかった会員の方々にも大会の様子が分かるようにということで、授業別分科会と課題別分科会の話し合いの様子をお知らせしたいと思い紙面を作りました。原稿は、それぞれ分科会の記録を担当された先生方や運営を担当された先生方に執筆して頂きました。執筆して頂いた先生方には心より感謝申し上げます。



第25回全道大会 釧路大会

期 日 平成16年10月14日(木)・15日(金)

会 場 1日目 釧路市生涯学習センター「まなぼっと」

2日目 釧路市立柏木小学校・釧路市立春採中学校

第26回全道大会は、石狩地区で開催の予定

国際理解ホームページをご活用下さい

今年4月よりホームページを全海研サーバーを借用して開設しています。今回発行の「会報」もホームページで見ることができますので下記のアドレスにアクセスしてみてください。またそのほか国際理解教育に関する情報が掲載されていますので是非ご活用下さい。

<http://www.zenkaiken.net/hokkaido/>

課題別分科会 第1分科会Aの様子から

1. 提言

武田 千春先生(トマム小学校)

総合的な学習の時間「トマムタイム」の実践から

環境, 国際, 人間各領域でおこなっている

国際領域: アスペンの留学生との交流 「文化」から広く世界に目を向ける構成に

(3年) 英語にふれる機会

ハロウィン

実践を通して

・文化に関心を

・コミュニケーション意思の疎通を

(高学年) 世界を知ろう

マレーシア

ベトナム

・一人一課題を

「サーモンキャンペーン」の活用

福田 貴志先生(白糠中学校)

ロールプレイ

・いかにして関心を持続させるか
自分ごととして問題を見つけるか

↓
~という課題について有効であった
「国際会議」を設定
地球市民としての「自分たち」
でどう解決するか

松本 太志先生(礼文華中学校)

地域に根ざした特色ある教育

国際理解班の学習

世界の広さが実感できない

外国人と接する機会が少ない

インターネットを用いた学習

・輸入品調査

・中学校の違い



2. 討議

・ベトナムについて子どもはどのようなイメージを持っているのか

・子供たちにイメージはない
ハノイ 日本人学校とのメールで

マレーシア
大都会と 森林

日本とのつながりを感じることができた

・興味をどう発展させ持続させていくか

3. 講評 助言者より

上西春別中学校長

青山 信一先生

・総合的な学習の時間で「国際理解教育」

・基礎, 基本

本校ならではの国際理解のあり方を

・小中連携はむずかしい

しかしながら, 子供は長いスパンで学習する 国際理解を通して
教えることよりも伝えたいことを

上川教育局指導主事

松田 賢治先生

・英語活動

「外国語会話」を通して

文化に慣れ親しむ

ただし, 段階をふんで

・他者の存在を

「知って」「考えて」「行動する」 共生へ

・発達段階をふまえた目標を

・キーワード

単元開発, 教材化

行動化にどうつなげるか

教科の目標, 国際理解教育の目標
観点

(1)文化素材の単元化

多面的文化, 普遍的文化

(2)世界の相互依存

(3)グローバルイシュー

(4)共生

キーワード ボーダレス

課題別分科会第1分科会Bの様子から



< 提言および討議の内容 >

(1) 駒津 和康 先生 (名寄市立中名寄小学校)

『総合的な学習の時間における国際理解教育の計画と実践』～国際理解教育におけるALTの活用～

- ・求める力・関わる力・伝える力に視点をおいて研究を進めてきたが、評価にかかわっては不十分な面も多い。単元開発で精一杯の面もある。単発的ではなく、学校としての取り組み、評価としての関わりが課題である。
- ・名寄市内では全ての学校においてALTが関わって授業を行っている。(多い所で35時間)
- ・地域の人材・ALTの活用に対する配慮・打合せは、学校がどのようにしてALTに関わってほしいのかを明確にして取り組んできた。ALTの考えも聞き、共通理解を図り、一緒に授業づくりをしている。
- ・子供たちの変容の面から見ると、昨年度から英会話の力は少しずつ向上してきている。ALTの参加した授業では、教室内でゲームや歌をする他に、外に出て体験的な活動ができるという広がりもあり、今後の見通しとして更に発展的な学習が期待できる。

(2) 赤川 欣胤 先生 (伊達市立伊達小学校)

『地域の人材を生かした国際理解教育の取り組み』

- ・評価の規準に関わってはまだまだこれからの面が多い。
- ・AETとの連携も、片言の日本語・英語で精一杯であり、授業のイメージを伝えるだけでも大変である。
- ・AETは全ての授業に入るわけではなく、年間国際理解を視野に入れた活動の中で適宜活用している。(一年生では学活・道徳・生活などで10時間程度)
- ・AETとの打合せは、教務が学校として考え方を伝えている。日程は学年ごとに希望しているが、なかなか伝わらない面もあり苦労している。AETにこだわらず、海外生活経験者等の活用も考えていかななくてはならない。
- ・原点は「ふるさとを知り、日本を知り、世界を知る」ということだろうが、どこまで知ればよいのかというのは今後の課題である。知識としてだけではなく、子供たちの興味・関心を高めることが大切ではないだろうか。

(3) 森田 泰成 先生 (音更町立音更小学校)

『社会科における国際理解教育の実践』

- ・学年によって福祉・環境・国際理解などテーマが決まっているので、発達段階を考えて組み込むことは難しい。あくまでも個人的な実践の範囲である。
- ・単元にはALTを入れないで構成した。国際理解教育であるから即、ALTの活用ということにはならないだろう。その教科・単元の目標をしっかりとおさえることが大切である。
- ・あまり構成を固定化すると、プランが先行し、柔軟な活動ができなくな。子供がどう変容してきたのかという評価をしっかりとすることが大切であり、そのことが次につながっていく。
- ・今回の学習によって、様々な面で子供の視点の広がりが感じられるようになった。例えばカレーライス作りの活動の中で、食品の産地について調べたり、外国産の食品を通して外国との関わりに目を向けたりと、ものをみる視点に幅が出てきたように感じている。

< 助言者より >

加藤 隆雄 校長先生より

- ・国際理解教育は「いつでも どこでも だれでも」が基本である。
- ・実践にあたっては国際理解教育の全体構造図を作成し、学校全体での共通理解を図ることが大切である。
- ・小学校の英語学習では、会話重視で、早いうちにネイティブの発音に慣らすことが大切である。
- ・教師の意識・子供の意識を高めることが不可欠である。

池田 卓平 指導主事より

- ・各教科と国際理解教育の関わりにおいては、まず、各教科の目標を達成することが先決であり、それをふまえて国際理解教育の内容を各活動に位置づけていくことが必要である。
- ・異文化の内容については、その普遍性・共通性についてきちんと教えていくと同時に、事象を多面的・多角的に捉えられるような指導が必要である。
- ・英語活動を行えば国際理解教育が充実している訳ではない。調べ活動も含めたあらゆる方面から、国際理解教育に迫る手立てが必要である。
- ・指導にあたっては、子供たちの『心の成長』が必要であり、単に知識・理解では不十分である。体験活動や問題解決の場面を織り交ぜ、実感を伴った理解をさせながら、心情を育てていくことが大切である。

課題別分科会第2分科会Aの様子から

提言者 土肥 哲哉（旭川千代ヶ岡中学校） 澁谷 宣和（札幌市立真駒内緑小学校）
助言者 三浦 務（上川教育局指導主事） 伊藤 和幸（江別市立第二小学校校長）
司会者 佐野 聡恵（岩見沢市立北真小学校教諭） 記録者 松下 友徳（旭川市立第一中学校教諭）
運営者 青山 孝博（苫小牧市立啓北中学校教諭）

分科会は、参加者20名ほどの中で提言発表より始まった。自己紹介により一層和やかな雰囲気の中で意見交流が行われた。公開授業の関係もあり、幼稚園教諭の方々や新任教諭の方の参加などから、新鮮な考えも含めている意見が交換された。その主な内容について報告したい。

まず、二人の提言である。土肥先生からは、平成13年度から14年度にかけての自校の実践を報告された。「総合的な学習の時間」の取り組みとしての国際理解教育の実践である。14年度は、マナーに関する学習も含め、コミュニケーションの能力の育成に視点を当てて取り組んでいた。コンピュータ・ソフトウェアのMS- Power Point を使用して制作したという、子どもの発表作品を紹介していただいた。「JICA」に関するものだが、「仮説を立てる」「調査する」「検証する」というスタイルで作製されていた。

澁谷先生からは、「学校の特色」として、姉妹校との交流活動など外国の方とのさかんな交流の様子を教えていただいた。国際理解を深める手段として、英語を使った学習活動を全学年で実施している。低学年の「English Activity」や、中高学年の「Hello Time」、全学年による「国際交流集会」、また、国際交流室における常設など、様々な人や文化に触れさせながら、外国の人々や文化に対する興味や関心を高め、自ら異文化に触れ親しもうとする態度を育成することをねらいとしている。

質問や意見交流では次のような点についての討議が中心であった。

学校の研究体制

「英語」に関する研修、年間のプラン

総合的な学習の時間・各教科や他の領域としての時数

自己評価の内容について

国際理解教育における英語教育・英語活動のとりえ方

「自己評価」では、生徒一人ひとりよる基準の差異はどうか。教師としての評価のあり方はどうか。通知表での表記のしかたについて、提言者より詳しく話していただいた。

また、国際理解教育と「英語活動」や「英語教育」に関しては、英語に偏りすぎの感や、もっと様々な言語についての学習も交流活動との関連で進めることがよいとする考えや、言語活動だけでなく、料理やゲームなど、もっとふれあいを楽しみながら学べる雰囲気を大切にしたいなどの意見があった。

また、十勝では、畜産大学やJICAの研修生など様々な多彩な交流が可能であることや、この中でも英語に関する早期の教育は、「コミュニケーション能力の育成」の見地からも必要であろう、という意見に、場内は納得の様子であった。

まとめとして、助言者の方からの話をいくつか要点を整理してお伝えする。

三浦先生からは、「総合的な学習の時間」について、今日的な課題も含めてお話ししていただいた。

中学校での一人ひとりが課題をもって解決していくというスタイルの「総合的な学習の時間」の実践がよかった。

小学校では、学校の環境をつくるという上で「国際交流室」の設置というアイデアが素晴らしい。という嬉しい言葉をいただいた。

「国際交流・協力」がテーマの本分科会として、具体的な事例を通して学習が深められたり、実際に体験を通して学習したり、活動にポイントが置かれて子どもの資質や能力が育成される。注意することとして3点が上げられていた。

学習の場の明確化 ねらいの明確化 「総合的な学習の時間」においては、関連する教科のねらいを忘れてはいけない。

伊藤先生からは、英語活動に関して、大変興味深く示唆に富んだお話を聞くことができた。

言語として伝わるものは35%、非言語で伝わるものが65%であるから、感性を磨くことが多くの人とコミュニケーションできる能力を育成する。

感じる力をつけてやりたい。

1年生から6年生までの間で、英語を学ぶという活動をカリキュラムとして工夫していく必要がある。日本人の多くが海外を旅し、海外で活動する昨今。日本とは何かという説明責任も生じてきている。日本文化に目を向ける理由がここにもある。



課題別分科会第2分科会Bの様子から

澄み渡る秋空の下、今年度の会道大会が、北の都旭川で開催された。全体会が盛大に開催されてのち、執り行われる課題別分科会。今年度は、それぞれのテーマ毎に2つの分科会(分散会)を設定し、より話し合いを深めやすいよう配慮がなされていた。それぞれが緊張の面持ちで、開会の時を待ち、提言の松田先生(富良野東中学校)は大きな体を屈めながら、パワーポイントの準備に余念がない。一方もう一人の榎本先生(旭川凌雲高等学校)は、すでに席につき、泰然自若といった雰囲気。どこからでも来なさいといった貫禄が漂っているの、「旭川でお薦めのラーメン屋はどこか」聞いてみた。

いよいよ開会の時間、しかし一般の参加者が4名しかいない。前にいる人数より少ないが、「少数精鋭」という言葉を頭の中で反芻しながら、渡辺先生の名調子で会がスタートした。

最初は松田先生の提言「テーマ：地球市民として生きるために～総合的な学習の時間での取り組みから～」。入念に準備していたパワーポイントが機嫌が悪く作動しなかったのは残金だが、それを補って余りある豊富な実践報告であった。以下、実践のほんのいくつかを紹介する。

1年次 ワークショップ(参加型学習)「ちょボラ」推進計画 ちょボラは「ちょっとしたボランティア」

2年次 課題追究学習 「二風谷研修」 ワークショップ 「貿易ゲーム」

3年次 実践型学習 「このゆびとまれ！」(自分発信ボランティア活動)

つづいて、榎本先生の提言「国際交流や国際理解を通じた国際理解教育の実践」は、カナダ・アルバータ州のリンゼーサーバー高校との姉妹校提携に始まる交流を紹介したものだ。持筆すべきは、PTA予算の中に、「国事促進費」という項目を設け、年間約100万円の予算を執行しているということである。

現在までの交流の経過は以下の通り。

- 平成 9年 凌雲高校研修旅行団カナダ訪問(38名)
- 10年 リンゼー高校研修旅行団旭川訪問(10名)
- 12年 リンゼー高校研修旅行団旭川訪問(32名)
- 13年 凌雲高校研修旅行団カナダ訪問(18名)
- 15年 リンゼー高校研修旅行団旭川訪問(18名)
- 16年 凌雲高校研修旅行団カナダ訪問(?名)



ちなみに、リンゼー高校の生徒達は、1～2年アルバイトをして自分の旅費を貯めるのが通例だそうだが、今の日本の高校生の場合はいかがなものか。

いよいよ研究討議、この時には参加者も倍増し7名(最終的には9名)。発言をお互い遠慮する雰囲気の中、提言の榎本先生が気を使って質問されるところからスタートした。その後いくつか発言がみられるようになり、活発な話し合いが行なわれたが残り時間がわずかとなったので、助言の先生方にまとめていただいて会を終えた。

木下 俊吾先生(留萌教育局指導主事)のまとめ

- ・資料をまとめるよりも、人と人とのコーディネートに努力。足を運ばなければよい教育にならない。
- ・体験学習の中で、生徒にどのような力を育むのかを鮮明に、学校教育目標のどこを具現化しようとしているのか。(継続的な取り組みのために)
- ・「意図的・計画的」な訪問は道教委の方針に合致、相手は「何」と交流したいのか?相手のニーズを開発することが必要。

後藤 隆司先生(羽幌町立幌北小学校長)

- ・3か年の育成カリキュラムに学校としての熱い取り組みが見える、見る 知る できるを満たした子どもの目線にたったプログラム、3年次に「情報共有の場」、指導者の研鑽、共働が必要。
- ・交流を通してアイデンティティーの確立、日本人である自分を見つめる。
- ・多感な高校生に強烈な人生観
- ・後援会、OB会が将来的に充実し、バックアップできればなおよい。

課題別分科会第3分科会の様子から

第3分科会は、テーマに沿って、お二人の先生から提言があった。

小松先生からは、「外国の方々が多く住む町」という学校の特色を生かした、生活科の目標、総合の観点に基づいた国際理解教育の実践が紹介された。

まず、転入してきた外国籍児童が疎外感を感じないように、その子の国の遊びや文化をその子を中心にして学級の子供たちとふれあう学習活動が紹介された。その後、日本の子供と同じようにけんかをしたり、言い争いをしたりするなど、子供同士の垣根が取り払われたそうである。

その他にも、地域に住む外国の方々との交流や英語活動などが紹介された。

このような実践を通して、子供たちに自分とは異なる見方・考え方に対しても共感的に受け入れようとする姿が生まれてきているということであった。

ある学級では、中国からの転入生のために、学級の備品に中国語とローマ字などの表示をつけて温かく迎えたそうである。

「日本語指導担当教諭」というお立場で勤務されている森田先生からは、日本語が全く話せない外国人児童への学習法及び対処法の実践が紹介された。幌北小学校には、国籍が違う、日本語習得レベルが違う十数名の外国籍児童が在籍しているそうである。

来日間もない子供たちには、身振り手振りを交えた非言語コミュニケーションが重要であること、同じ母国語を話す子供同士でグループを作ることなどで、不安を和らげ心的ストレスを増やさないよう配慮することなどが大切であると報告された。

日本語を指導していく際は、「水を飲む」「ドアを開ける」などの体験を通して言葉を学ばせていく『体験的学習法』、交通ルールや町並みの様子を理解するために、現地に出向き、五感を通して学ぶ『現地学習法』などの言語の認知理解が早まる具体的な方法を紹介していただいた。

参加者は少なかったものの、お二人の提言に対してたくさんの質問があり、保護者との連携の取り方、外国籍の子供との出会いの際に気をつけることなど、実践を通して具体的な方法をお聞きすることができた。

最後にお二人の先生から助言をいただいた。

齋藤先生からは、お二人の提言に対し、「人とのかわり」を大切にしている素晴らしい実践だという言葉をお聞きいただいた。また、各学校で国際理解教育を進めていく際にふまえていかなければならないことについてご示唆をいただいた。

高野先生からは、ご自身が、転入してきた日本語をほとんど理解していないフィリピン国籍の母子とかかわってきた興味深い体験をお話していただいた。

分科会を通して、外国人や帰国子女への対応は、何よりも、子供同士、子供と教師の心の通い合いを一番に考えていくことが大切であると感じさせられた。



課題別分科会第4分科会Aの様子から

本分科会では、「外国語活動を通してコミュニケーション能力を育む国際理解教育の実践」という課題のもと2本の研究発表があり、その発表をもとに話し合いがもたれた。

- ・「コミュニケーション能力を培う英語活動のあり方」 当麻町立宇園別小学校
- ～本校における国際理解教育（英語活動）推進の現状～ 教諭 山中 謙司
- ・「小学校英語活動導入タクティクス」 古平町立古平小学校 教諭 三和 史朗

2人の先生方からは、現在それぞれの学校で行われている実践の様子が成果や課題とともに細かく発表された。両校とも昨年から総合的な学習の時間に位置付け、着実に実践を積み重ねてきた上での発表であった。山中先生の発表は、JTE（日本人の英語講師）による英会話を中核とした国際理解教育の町内のモデル校でもある宇園別小学校の実践で、学校教育目標との関わりや活動の年間カリキュラム、ALTを含めた三者による取り組みなどが述べられた。また三和先生の発表は古平小学校におけるALTとの英語活動の実践で、導入期での基本的な押さえやポイント、また小学校英語活動のゴールをどう押さえるかなども述べられた。

その発表を受け、質疑応答も含めて研究討議が行われた。質問内容は、英語活動の中に文字をどの程度どのように取り入れていくべきか、ALTとの授業での担任の関わり方、さらに総合的な学習のねらいと評価・評定の問題などが取り上げられた。

今年度は同じ分科会に2つの会場が設けられ、2本の研究発表という事もあり、論議の時間もあつたためか、じっくりと話し合いが進められた。

最後に、2名の助言者の先生から、論議の内容やこれからの方向性も含めてまとめていただいた。

久門 好行先生（帯広市立花園小学校長）からは、まず、研究発表を行った2校の校内体制の充実に触れながら、昨年の資料を元に全国と比べた北海道の英語活動の遅れが指摘された。又、総合的な学習全体も押さえた年間指導計画の大切さやその中で1時間1時間つきたい力を明確に目標設定していく事の重要性も指摘され、中教審の答申などから、今後の取り組みにおける課題についてもまとめられた。

砂川 昌之先生（空知教育局指導主事）からは、まず、研究発表を行った2校の実践から、今後取り組む学校で参考にすべき内容がまとめられた。又、今後の取り組みの方向性として、指導計画作成における視点や活動のポイント、子どもの変容をどうとらえてどのように評価し改善していくかなど評価とねらいのポイントについても指摘された。

参加者がやや少なく、これから活動を進めていくために、ここで色々学習したいといった参加者が多かったのか実践のぶつかり合いといった論議は少なかったが、内容の濃い充実した分科会であった。

今後、より実践が積み重ねられ、その実践を検証、交流していくことの必要性が再確認された分科会であった。



課題別分科会第4分科会Bの様子から

テーマ「外国語活動を通してコミュニケーション能力を育む国際理解教育の実践」

提言者 佐藤美鶴（旭川市立近文第二小学校） 河井義徳（幕別町立白人小学校）
助言者 千葉 繁（空知教育局 指導主事） 辻口 徹（札幌市立簾舞小学校長）
司 会 済藤和彦（釧路市立新川小学校） 記 録 植村博行（旭川市立永山西小学校）
運 営 桜田弘道（置戸町立秋田小学校） （参加数24名）

旭川市立近文第二小学校 佐藤美鶴先生の提言 「やってみよう！英語活動」

「英語活動に取り組んだことのない学校の」「英語が苦手な担任による」「試行錯誤の実践」を報告。
実践の2つの柱 「英語活動」～英会話が中心 「国際理解活動」～交流会や調べ学習が中心
・英語活動には色々な形があるのだろうが、担任の熱意でベストを尽くすことが大切ではないか。
・外国人との交流は「つうじたんだ」という感動が大切。
この活動を通して、子ども達にとって外国が身近になった。今後もその役割を担いたい。

幕別町立白人小学校 河井義徳先生の提言 「B-SLIM理論の実践」小学校における英語活動

B-SLIM理論とは～英語を母国語にしない人のための指導理論。（カナダアルバータ州立大学）
・「教える」「身につける」「使う」「評価」の段階にそって系統的に行う。
・オールイングリッシュなので、カード等を利用し視覚に訴えることやゲーム（アクティビティ）
を行うなどの工夫で子ども達は楽しみながら英語を獲得していくことができる。
カナダ学～小中高一貫の鹿追町における英語教育。B-SLIM理論とこれまでの実践に基づいたプ
ランで現在行われている。次年度はさらに時数を増やすなど研究を進めている。

研究協議（抜粋）

- (意) 中学校から見た小学校の英語活動について、(慣れない小学校教師が指導するので)指導で間違いが見受けられる。また小4でローマ字を学ぶが6年生でやると中学との流れがよい。(札幌:吉田先生)
- (質) オールイングリッシュのリスクについてどう思うか。(札幌:吉崎先生)
苦手な子は不安もあるようだが、慣れが解決している。リスクよりメリットが大きい。(河井先生)
- (質) 教師の発音の美しさについてどう思うか。(札幌:吉崎先生)
美しさをいいだすと日本人誰もが難しいのではないか。(自分の英語が)美しいといわれたことはないが理解はしてもらえているのでそれでよいと考えている。(河井先生)
担任が行うことが大切で、きれいだけでなく良いのではないか。外国語を教えるのではなく、外国の文化を教えたい。(佐藤先生)
「World English」の考えで、ネイティブでなく(ジャパニーズイングリッシュ)でも担任が話すことが大切だと思う。
- (意・質) 鹿追町の取り組みは、本当に素晴らしい。JETの加配の様子(課題)は?(旭川:田中先生)
(臨時採用の先生だが)中学の英語の免許しか持たなく他の教科の指導ができない。(河井先生)
- (意・質) 子どもにとって必要感のある英語が大切だと思う。
評価については?(札幌:小野先生)
意欲を育てたいことが一番の思い。良い経験をつませたい。
評価も関心意欲態度的なものが多くなってしまう。(河井先生)

助言者より

- ・総合のねらいから外れないように、例え一年でたった一語のみの定着でも、そこにいたる試行錯誤が大切。言語を学ぶことも大切だが、そこに至るまでの過程を大切に、教育課程にどう位置付け、どう評価するか。今日の発表から自校での取り組みを考えてほしい。(以上、千葉先生より)
- ・先生方の意欲が子ども達に影響するのではないか。児童が物怖じしないで英語を使っている姿。小学校ではそういう興味が高まる取り組みが大事。英語活動の取り組み方を整理するため、総合的な学習の時間のねらいや国際理解教育のねらいを見直してほしい。(以上、辻口先生より)



授業別分科会第1分科会(幼稚園・幼小交流・小学校低学年)

授業者	牧原 由香(さくらおか幼稚園)	荒川美奈子(旭川市立北光小学校)
授業協力者	加藤 広章(旭川市立北鎮小学校)	櫻田 弘道(置戸町立秋田小学校)
助言者	三和 史朗(古平町立古平小学校)	池田 卓平(上川教育局指導主事)
司会者	三井 輝夫(美瑛町立美瑛小学校長)	
記録者	鎌田 優子(旭川市立大有小学校)	
運営者	中村 哲也(旭川市立正和小学校)	斉藤眞美子(中川町立中央小学校)

討議の柱

- 1 幼児期からの英語活動の在り方
- 2 異種学校間の交流の在り方
- 3 異文化と出会う授業の在り方

討議の内容

1 授業について

(1) 授業者 牧原 由香教諭

(クラスの紹介について)3才は3年次保育,4才は2年次保育の29名。保育の中身は、自由遊びの後に朝の活動として普段は設定保育をしている。その中で文字の遊びや英語教室など取り入れ異文化活動をしている。それらの活動からいろいろなことに興味を持ち始めている。5才児は就学に向けて座って聞くことを指導してきている。

(英語活動について、中村利恵英語講師から)週に1度の英語活動を12時間扱いで行っている。言語材料は、日常生活との接点が多いものから色・食べ物・体・動き・動物を取り上げ扱っている。活動内容(アクティビティ)を工夫し、身体を使い繰り返しながら英語を楽しく覚えてきているように感じている。

(2) 授業者 荒川美奈子教諭

幼稚園年長組と2年生との交流をしている。昨年度、1年生と年中組の交流から始め、今年度2年目の交流活動となっている。1学期にも1度交流をし、リレー遊びや写真を交換し合って触れ合ってきた。本校では10年前から国際交流をしてきている。1年に1度、外国の人を呼んで文化や遊びをしてきている。本時はこれまでのその遊びを幼児に伝えたいという設定でした。子供達は早くやりたいと楽しみにしていた。今日の交流の中では普段しゃべることが苦手な子もはさみを上手に扱えない子も幼児に教えていた姿があった。

授業者 牧原 由香教諭

交流を重ねてきた効果もあり、招待カードももらって、早くお兄さんお姉さんに会いたいという思いを強くしていたようだった。(本時に関して)遊びに関しては、幼児たちは初め戸惑っていたが、お兄さんお姉さんたちがどんどん誘ってくれたので「たくさんできた」「楽しかった」と言っていた。今までの交流があり慣れ親しんでいたおかげで、幼児たちは自分から話したり動いたりすることができたのではないかと思う。

(3) 授業者 加藤 広章教諭

道徳と国際理解のねらいがあった。本時で扱った素材を、効果的に活用できたのかなと反省している。ALTとの交流の後の本時であったので、今日はVTRで登場する活用に留めた。本校の児童は、転入が多く日本各地から集まってきたので、児童の親も言葉や生活の違いで不安を抱いている実態がある。そういうことから本時の中で「違っていいね」ということが学習できたことは意味のあることではないかと考えている。

2 授業についての質疑・応答

- (札幌市立もみじ台西小学校・眞木孝輝校長)いつも英語活動の授業を見ているが今回のこのような授業なら国際理解教育として十分やっていると見させてもらった。
- (芽室市立芽室西小学校・杉浦 勲教諭)いろいろな授業を見てきたが、幼児を見て元気で明るくびっくりした。英語もスムーズに話していた。小さい頃からの学習が大切だと実感した。幼小交流の授業に関して、2年目ということなので今までの変容について教えてほしい。また、今回の遊びの紹介は本時が初めてだったのか、幼児から見ると難しい遊びではなかったのか、2年生から見るとどうだったのかを聞かせてほしい。
- (函館市立駒場小学校・中尾靖人教諭)幼少合同の交流を見て、2年生が、幼児に来てほしいという思いが伝わってくる姿がよかった。かわりを持たせるためにどんな工夫をしてきたのか。遊びの資料はどのように収集したのか聞かせてほしい。
・(授業者から)昨年7月に始めて交流をした。初めは緊張していて、幼児に話しかけることが出

来ない。

- ・鬼ごっこもやりたくないという様子だった。2回目は、「前に会ったよ」「一緒に手をつないだよ」という経験から、今度は自分から声をかけたり手を差し伸べたり、写真で名前を覚えて名前を呼んだり出来るようになり、次は給食と一緒に食べてみたいというように変化してきた。遊びに関しては、1年生の時に外国の人から教えてもらっていたホーシューズや今年度になって中国の人に教えてもらったもの等を取り扱った。剣玉やコマは百寿大学の人に教えてもらった。資料に関しては、在日韓国の人に新聞や衣装をお借りしたり、市の国際交流課や本校にある図書館の分館でいただいたり調べたりした。今年の1年生も今の年中組と交流をしている。2年間の交流を通して顔や名前を覚え、つながりが深まっていくと考えて交流を実践している。かかわり方は、幼稚園の子に「楽しかった」「おもしろかった」と感じて帰ってもらえるように優しく教えたりやりやすいようにしてあげたり所用ということを指導してきた。
- ・(幼稚園担任から)バンブーなど難しいことには、縄跳びを使って挑戦していたところだった。今回難しいことにも取り組めた自信が成果としては大きかったようで、コマも最初は出来なかったが最後には1回まわせたなどと帰りに話す姿もあった。かかわりについては、昨年度は幼児達も緊張していたが、だんだんと、「今度は幼稚園に呼びたい」などというように変化していった。今年になって名前を呼び合いながら交流できたところが、深まりを実感できたところだった。担任同士で連絡を密にして活動のつど反省をし、次回への課題を明確にしていった。

3 討議の柱を視点とした質疑・応答

(1)「異種学校間の交流の在り方」について

(占冠村トマム小・武田教諭)小さい村なので幼稚園と1・2年生が交流している。お互いに顔と名前も知っている。普段の学校生活では1年生が2年生に頼っている姿が多いが、その時は自立心が感じられる活躍をしていた。幼稚園側からも、卒園後の子供の姿が見られるのでよい効果があるようだ。

(古平小・三和教諭)校舎内に幼稚園があるが、学芸会や演劇鑑賞会の共通場面しかないのが現状である。保育園は離れているので交流はない。

(あしたば幼稚園・松崎教諭)小学校と5年間ぐらい交流をしている。三園くらいで交流をしていたが、その後中身が薄くなって小学校の子が発表してありがとう・さようならという形で終わり1回きりになってしまっている。もう少しあってもよかったので、今回のように2年続けて交流しているということを私たちもしてみたい。

(緑ヶ丘小・松倉校長)大変楽しそうに活動しているのを見て、長く続け広く交流発展させていくにはどうしたらよいかを考えている。今は、担任同士で思いが一致した時に実現しているのが実態ではないだろうか。その先生がいなくなったらその交流もなくなってしまう可能性がある。やはり個人的なやり取りから職員の共通理解と学校や幼稚園のあり方や経営の中で特色にしていこうというものがあれば思いっきり出来ると思う。年間計画を持って進めるべきで、どんな子に育てるかを考えていくことが大切ではないか。

(2)「幼児期からの英語活動の在り方について」

(古平小・三和教諭)幼・小・中・高とALTと交流をしているが、幼稚園での英語活動をこれから注目していきたい。

(秋田小・櫻田教諭)幼稚園から慣れ親しみ、さらに小学校で6年間続けて慣れ親しむという取り組み方について英語講師の立場からどのように考えているか。幼稚園段階でもうすでにカードを活用して単語の習得に働きかけているような場合、小学校で学習を始めるときに、それはもう既に教えてもらったというようなことは起きないか心配に思うが・・・。

(中村利恵英語講師)幼稚園から英語に触れることで、小学校においてさらに楽しみながら学習を進めることが出来るのではないかと感じている。やっていたからつまらないというのではなく、知っているから自信があるよということを楽しめるのではないかと考えている。

(北鎮小・加藤教諭)本校1年生では朝の活動で英語活動を行っているが、幼稚園でやっているから楽しくないということはない。ALTは、こんな言い方も出来るよというように広がりのある関わり方をしてくれているので、もうこれで正解だから終わりということはない。

(永山小・鈴木教諭)ALTが来る日に、学校で英会話を教えるのかコミュニケーションを教えるのかでは違うのではないかと思う。うまく話が出来ないけれど、話してみるところが大切になってくるのではないか。それが楽しさや異文化を伝えることにつながっていくことになるのではないか。

(3)「異文化と出会う授業の在り方」について

(北光小・藤田教諭)加藤先生と1年生の一体感があってよかった。今何を教わっているのかなということを道徳を通して自分の内面を意識化していたのではないか。太陽の色・動物の鳴き声などがあつたがテープの鳴き声で子供たちの鳴きまねの声もどんどん変わっていった。カードゲームでも、自然に英語の鳴き声で交流していた。

(北見市・菅原教諭)違和感を持って聞いていた鳴き声が、最後はそれも受け入れて子供たちは学習していた。郷土愛という観点も先生の中にはあつたのではないか。

(授業者から)日本各地から転動してくると地域柄、方言なども感じられるので、違和感を感じ

じたときに「変だ」ではなく「おもしろい」という発想をしてほしいという願いはあった。

4 助言者から

(1) 三井 輝夫(美瑛町立美瑛小学校長)

国際理解教育ということで英語が学校づくりのキーポイントになる。教育改革の答申などから「英語が使える日本人」が注目されるだろう。小学校での英語会話活動について総合活動で英語を指導している人(ALT)などをどんどん活用していけるように予算化している。国際共通語として英語でコミュニケーション能力を育てる。小学校は中学校の英語科の準備ではなく、活動や遊びを通じて丸ごと英語の感覚を養い絶えず興味や楽しさを持たせていくことが必要である。

さくらおか幼稚園の授業を見てショックを受けている。ここまでできているのかということ。3人の先生の笑顔がすばらしい。英語が楽しくなるのではないが。

異種学校の交流のあり方では指導計画や工夫が一番大切。継続性が重要であった。以前の英語活動があったからこそ、前体験を生かした本時のあり方があった。学校として国際理解のあり方が重要になってくる。2年生の交流も2年間に交流があることが子供を変えていくことになっている。

異文化との交流では教師のやる気や授業のやり方、チャンスもあるのではないかと立場でいくらでもやっていけるのではないか。進めている国際理解教育から保護者・地域に発信していくことが必要ではないか。やはり、夢を持ちワクワクしながら学んでいくことが出来るのではないか。

(2) 池田 卓平(上川教育局指導主事)

国際理解教育は各教科とは違う。各教科は昔からの遺産として体系化させて系統性がある。答えがある。国際理解教育はこれからの世界へ自分で未来を切り開いていくことではないか。

国際理解教育の中に教科の目標をとけ込ませながら関連をより図って進めていくことも考えられる。生活科ではその場の工夫ということで、どうやったらたくさん楽しんでくれるかという観点があった。幼稚園の子と一緒に交流することで改めて外国の遊びをどう見せていこうかがテーマでもあった。

国際理解教育には、英語活動・調べ活動・国際交流活動がある。意味のある活動を仕組んでいくことが大切ではないか。

動物の声を聞く、単語としてカード遊びをするなどの活動が多様な異文化に触れるために効果的な活動だった。

異種学校間の違いでは、一緒になって交流することなどから、異文化の交流、コミュニケーション能力を養うことになるのではないかと思う。



授業別分科会第2分科会 (小学校中学年・小学校高学年)

授業者 郷地利明 (旭川市立東光小学校) 森本真也 (旭川市立愛宕小学校)
授業協力者 笹木卓三 (帯広市立第六中学校教頭) 済藤和彦 (釧路市立新川小学校)
助言者 和島徹男 (旭川市立日章小学校長) 藪 和幸 (旭川市教育委員会主査)
司会 関口 徹 (旭川市立啓明小学校)
記録 石川裕司 (旭川市立緑新小学校)
運営者 菊池安吉 (占冠村立トマム小学校教頭)



討議の柱

- 1 国際理解教育における身近な素材の教材化
- 2 音声を大切にした小学校の英語活動のあり方

討議の内容

1 授業について

(1) 授業者 郷地利明教諭

旭川の昔の様子から始まり、子どもたちが課題をもって学習を進める。本時は発展学習。国際理解においては、アイヌの学習が自国文化なのか異国文化なのか、どのジャンルに入るのか授業者自身迷った。ただ、明確に区別されていないようだ。

子ども自身、アイヌ文化についてよく理解していなかったが、授業を進めるにつれてアイヌ人との「共生」の芽が少し出てきたのではないかと。子どもにとってはいい経験ができたのでは。

(2) 授業者 森本真也教諭

英語活動を学校教育で扱ったのは今回が初めて(授業者が)。

楽しく意欲的に活動できるコミュニケーションとして扱う。

5年生のときに4人のALTと活動した経験がある。外国人講師ともっとふれあいたい。楽しかったという感想が多かった。

6年生になってまずは英語で自己紹介。ALTと一緒に身近な素材で料理を作る。体験の中から言葉を覚える。英語を使ったゲーム。質問も英語で行う。発音については教師が教える。

ゲームについて、インターネットなどで調べたが幅が広すぎたため、教師が与えた。

人としての出会いを大切に総合の授業を進めたい。

昨年に比べて子どもたちは大きく成長した。そのことが垣間見られた授業だったと思う。

2 授業についての質疑・応答

(1) 郷地利明教諭の授業

旭川市の単元の扱いについて

・「くらしを高めるねがい」(社会)の中の一部。訓読本の中でもアイヌについてはふれているが深入りはしていない。

子どもたちはアイヌに対して偏見をもたずに学習できていたようだが、課題別グループの課題は教師が決めたのか。また楽器についての課題は出ていなかったようだが、なぜムックリを扱ったのか。

・課題については教師の意図をある程度通したところはある。ビデオで導入(大変よく編集されていた)子どもの感想の中から教師が課題を選択して子どもたちに提供。課題については、元々インターネットで調べやすいものに流れていた。楽器について目を向けさせることができなかった。ムックリについては、自分たちで作れるアイヌ文化、手軽にできる楽器ということで扱った。

アイヌの入と一緒に生活しているという認識はどうか。

・アイヌは旭川に住んでいる自分たちと同じ一人の人間という意識をもっている。

アイヌについての実践を紹介してほしい。

・総合の時間で扱う。アイヌの人をゲストTに招く(阿寒の村から2人)。ムックリ演奏。キツネの躍り。調べ活動。アイヌの民族衣装づくり。学芸会の劇として発表。

ムックリを上手に演奏できなかった人に対して、もう一度演奏させるのか。

・うまくできなかった子は、アイヌ記念館に個人的に行く。(来ていいよという許可済み)

国際理解とアイヌ文化をどう結びつけるのか?

・世界各地に様々な宗教があり、様々な人種がいるのと同じ。「共生」の心。

ムックリが使われている国を世界地図で示したらよかったのでは。

ムックリという本物にふれた経験はとても大きかったと思う。(子どもの感動を呼んでいた)
授業者の意図からそれないように、事前に授業者とゲストTとの綿密な打ち合わせが必要。

「異文化」ではなく「多文化」という捉え方で理解してほしい。

子どもたちの反応がとても良かった。他のクラスにおいても同様の授業を行うのか。

・ムックリを扱うのは4年1組のみ。他の学級については、本時のビデオを見てもらう。

(2) 森本真也教諭の授業

A L Tに言われたことがわかっているのかどうか。そこを確認して授業を進めたのか。

・A L Tとの打ち合わせでは、そのことを確かめるように打ち合わせしていた。感情を表情に出す子とそうでない子との差がある。

心を問うことが、コミュニケーション能力のポイント。日常の授業の中で応答の訓練をすることが必要。初期の頃は、表情やジェスチャーで相手に伝える。

子どもたちにとって必要感かつ興味のもてる英語活動だった。

A L Tのジェスチャーを読み取って内容を理解しようとしていた。本單元以外に英語力を高める方策がとられているのか。

・英語活動の時間はない。国際理解のカリキュラムづくりを行う中で、参考のカリキュラムとして取り組んだ單元。ただ、朝の会や休み時間など、時間外の時間を使って英語活動に主体的に取り組んでいる

この授業で子どもたちに英語力が定着したとおさえるのか。

・自己紹介については英語力が定着。

個性あふれる学級が1つになっていくためには、話し合いやコミュニケーションが必要。まさに国際理解教育そのものだ。

小学校における英語教育は、苦手意識を作らずに必要な感をもたせること。難しい質問内容を前時までに子どもたちはよく覚えた。

北海道の英語教育として、基本は担任が授業を行う。音声を中心とした活動を行い、子どもが興味をもったら書き方を教えればよい。文字よりも音声。発音も大事だがリズムも大事。子どもたちの活動の中で必要感のある言葉を教える。意欲を評価。知識理解は評価しない。

3 助言者から

(1) 和島徹男(旭川市立日章小学校長)

「行動化を促す国際理解教育」、次の行動に発展するような行動化を促す授業だった。

子どもたちの表情が開放的。学習訓練もされている。

神居古潭祭に子どもたちを参加させるべき。言葉以上の教育。

「アイヌ」ではなく「アイヌの人々」と言うべき。

コミュニケーションの意軟化を図る授業。授業づくりの足跡が見られた。

2人の授業に共通して言えることとして、異文化から教えるのか、自国文化から教えるのか。2つのパターンがあるが最終的にめざすところは同じだ。

総合でつけなければならないこと。それは教師の授業における指導力。教科の指導。

子どもの育ちを見て授業を行う。人を介在させて授業を行う。コーディネータカをつける。地域との連携を行う。

(2) 藪 和幸(旭川市教育委員会主査)

アイヌ文化を学ぶ意義 ・アイヌ語の地名の多さ、文化遺産、身近な施設や人材の豊富さから考えても旭川で学ぶ意義が大きい。

単元づくり ・ゲストTとの綿密な打ち合わせ、準備が素晴らしい。

授業について ・ムックリを作成し演奏。子どもが具体的に身近なものとして感じたのではないか。

感動の深まりがあった。各国のムックリ紹介では、広がりの中で素晴らしかった。ふれあいが非常に大きかった。アイヌ文化を大切にしようという気持ちが培われたのではないか。

異文化なのか多文化なのか ・多様な民族文化とおさえるべき。

80%の学校で国際理解教育(35%で英語教育)。活動が活動で終わらぬようA L Tとの関連が単元のねらいと合致している。

本時は問題解決的な学習。準備を含め前時までに一生懸命活動していたのでは。子どもたちは目的意識をもって授業に臨んでいた。

A L Tに質問できたことや意味が通じたことで達成感や自信がついたのでは。子どもの意識や意欲を大切に授業づくり。

授業別分科会第3分科会（小中連携・中学校）

授業者	向井 秀樹（旭川市立聖園中学校） 小林 直樹（旭川市立東陽中学校） 佐々木 智美（旭川市立永山南中学校） 上村 育代（旭川市立嵐山小中学校）	授業協力者	橋詰 典明（厚田村厚立田中学校） 小野 博史（札幌市立藻岩南小学校） 小川 勉（北村立北村中学校教頭）
助言者	助乗 博美（当麻町立当麻中学校長） 金子 圭一（旭川市教育委員会主査）	司会者	大城 亮二（旭川市立永山中学校）
運営者	清治 信一	記録者	松下 友徳（旭川市立旭川第一中学校）

討議の柱

- 1 国際理解教育における身近な素材の教材化
- 2 国際理解教育で学んだ力を他の場面でどう生かせるか
- 3 発達段階に応じた課題のあり方
- 4 自ら問題解決し実践していく学習活動の構成

討議の内容

1 授業について

(1) 授業者 向井 秀樹教諭

国語の時間で培った力を総合、特に国際理解の時間で生かすことができないかと考えた。ディベートの裏側には討論を行うまでの過程で、事実に基づきいかに客観性のあるデータによる討論を組み立てるかを重視した。バングラディッシュへの援助は「お金や物資」による援助と、「人材派遣」による技術協力の両方がうまくかみ合わないという事を感じた生徒がほとんどだった。また、日本と発展途上国が文化の交流なども含めて必要ではないかという意見や、ディベートを通じてそれぞれの立場から日本の国際協力のあり方を多面的考えることができたのではないかと考えた。

(2) 授業者 小林 直樹教諭

授業は3つの視点「学習形態の工夫」、「体験的な学習の導入」、「主体的な考える力」に重点をおいて授業を組み立てた。1つ目の視点として、ドイツから帰国したばかりの佐々木先生やベトナムやメルボルンに派遣されている先生方と交流する経験をしている。2,3つ目の視点として、去年は話を聞いて頭の中で考えるだけで終わったため、主体的に学び、行動を起こしてみるという課題を持ち、本時は、毎日出るゴミはどのように分別するとゴミはゴミでなくなるかということを体験させた。

(3) 授業者 上村 育代教諭

いろいろな人とかがわり思いやりや協調性を育てていくことと、自分の考えをうまく伝え表現力をつけることを目的としている。本時はまとめの段階で、外国の方とどのようにコミュニケーションをとっていくかという段階である。中学生は習った英語を使ったり、小学生は絵やジェスチャーを使い自分の思いを相手に伝えることをねらいとした。また、サブティーチャーの活用法はどうだったのか改めて勉強したい。

2 授業についての質疑・応答

(1) 向井 秀樹教諭の授業

・ブローカーというような難しい言葉は事前に確認しておいた方がよいかののではないかと考えた。また、資料提示の方法も何の資料に基づいているか等、論拠を示す部分が弱くなかったか。単元目標の2つ目にあるように「相手の考えや思いに耳を傾け、尊重する。」とあるように、自分の考えをしっかりと伝える。そのためにも事実と思いを混同しないように配慮する必要があると思われる。

(向井)ブローカーなどできるだけわかりやすい言葉で置き換えないと相手に伝わらないと指導をして、また、資料提示の方法もインターネットのどのホームページから得た情報なのか明らかにするようにレポートの際取り組ませている。論題の設定についても、バングラディッシュとイラクや産油国とそうでない国など、日本の国益にかかわる論題についても話題となった。

・子どもの振り分けについて。ディベートの内容がどちらもプラスなことなので、話し合いの段階で迷いはなかったか、また、学力のある子なら最初から両方の必要性に気がついたのではないかと考えた。

(向井)希望制をとった。他の子どもたちも立論、根拠を立てるところまでいっている。

テーマの決め方は子どもたちの興味・関心が一番お金による援助か人材による派遣が高かったので本時のような議題になった。

・聖園中学校の総合的な学習の全体像の中で、本時の部分の位置付けについて。

(向井)聖園中学校の総合的な学習の大きなテーマはJRC(Japan Red Cross,日本赤十字社)活動である。

JRC活動の3つの柱の中で特に、「国際理解・親善」という部分について取り組んできた。JRCの活動の中に、「気付く」「考える」「行動する」という行動目標があり、子どもたちの発達段階により、1年生は世界について知ろう、2年生は日本と世界の国々について考えよう、3年生は私たちにできることを実践しようという内容で進めている。

(2) 小林 直樹教諭の授業



- ・選択社会（12時間）の後期や生徒が3年生になったらどのようなになるか。
年間のテーマが環境になっているので、そのテーマからは外れずに、自分たちで国別や地域の歴史等について取り組ませることを考えている。後期は課題から作る個人別調べ学習を予定している。知識理解を中心とした内容になる。

(3) 上村 育代 教諭の授業

- ・嵐山タイムの外国人の先生の国や意図についてなにかあったのか。
(上村) タナー(英)さんとグリム(加)さんは旭川市内のALT、コウ(中)さんは大学院生、ジャクソン(米)さんは旭川市内の国際交流委員。欧米の人は表情やジェスチャーが豊かなので嵐山タイムのねらいと通じるものがあり、その人たちの表現力から学ばせた意図というともある。

助言者から

(1) 助乗 博美 (当麻町立当麻中学校長)

授業について

嵐山小中学校：表現活動、交流活動、人材の活用や小中併置校ならではの子どもたちを主体とした取り組みが見られた。

聖園中学校：総合的な学習の時間での国際理解のJRCの柱を、健康安全、奉仕、国際理解、親善の中の奉仕を大きく捕らえがちな傾向があるが、1年、2年、3年で気付く、考える、行動するという部分で捉え、学校としての取り組みが見られた。

東陽中学校：小林先生と佐々木先生のコンビネーションが大変すばらしかった。前時の発表から始まって、講師の話、VTR、体験が1つの流れになっていた。

H7年の旭川大会では「身近な国際理解教育の推進を求めて」というテーマだったが、今年の提案された中身は、大胆にいろいろな内容や方法、人材の活用など大きな提言をくれたと思う。学校での国際理解教育の推進にあたっては、学年や学校全体として取り組んでいくにあたり、教職員の共通理解が必要であり、また、知識だけではなく、実践して行動することをや効果的な指導のあり方を常に模索していくことが大切である。

(2) 金子 圭一 (旭川市教育委員会主査)

研究内容の1つ目の「自ら問題解決し、実践(行動)化していく学習活動の構成」については聖園中学校の向井先生の授業、2つ目の「自ら世界とのかかわりを見出す身近な素材の教材化」については、東陽中学校の小林先生の授業、3つ目の「地球市民としての認識を深める総合的な学習の時間」については嵐山小中学校の上村先生の授業から多くのことを学ぶことができました。研究内容の1がなぜ求められるのか。それは、人間として行動する力が必要であり、そのためには問題解決型学習も必要になり、同時に参加型の授業が求められている。ディベートの意義は3つあり、1つ目は話し合いの技能を高め、2つ目は思考訓練になり、3つ目は意思決定の過程を疑似体験できる。話し合いの技能については国語科の基礎の充実という部分と関連があり、思考訓練については各教科の4観点の思考判断ということが求められている。このことから本日の総合的な学習の時間におけるディベートの意義というのは意思決定の過程を疑似体験できることにある。疑似体験することが国際問題に主体的に参加する態度が養われる。子どもたちの様子を見てみると頼もしく感じた。

研究内容の2について、なぜ、世界とのかかわりについて身近な素材が必要かということ、ゴミの問題1つとっても深刻化、多様化している。自分ひとりが考えたところでどうにもならないと考えるかもしれないが、国際的な問題は自分たちに降りかかってくる現実がある。そのような大きな問題をいかにして身近な問題として捉えるかということが求められている。現在の学習指導要領になってから教科の目標を達成することは変わらないが、内容については、指導要領以外の内容を扱ってもいいことになっている。例えば、社会の内容の範ちゅうであれば、1年生に公民分野を教えてもいいことになる。公民分野の学習指導要領のなかに、「地球環境、資源、エネルギー問題については国際的な協力や協調の情勢に着目させるとともに、身近な地域と世界との関連性を重視し、世界的な視野と地域的な視点にたつて、追求させることを工夫すること」まさにこのことが今日の世界的視野でありながら地域に視点を当ててゴミ問題を考えることができる。他にも、人権問題などいかに生徒たちに身近な問題としてすり合わせ、世界的な視野で考えさせることが必要である。

研究内容の3の地球市民という言葉をよく耳にするが、どのような資質、能力が求められているかというと、平成8年の中教審の答申の中に、共生の心、自己確立、コミュニケーション能力の3つが示され、この3つがこれらの地球市民に求められる資質になると考えられる。本日の授業は表現力を高める授業ということで、その部分にマッチした授業だった。本日の授業で特に2点学んだことがありました。1つ目は、心の教育の充実という部分で、豊かな表現というのは、豊かな心というのが基盤ではないかと思えます。そういう意味で本日、4人の外国の方と密接な交流を行っていた。これは心の教育としては非常にすばらしい交流ではなかったかと思う。2つ目は、上村先生のみならず、嵐山小中学校の先生方が、一人一人の子どもたちに寄り添うようにかかわってきた。少人数指導、そのような指導があってこそ表現力は育つと思う。

教師の指導と学校の教育力という言葉があるが、逆には使わない。一人一人は指導力、全体で言うと教育力ということになる。そして国際理解教育という学校全体として、相対的な教育力を高める取り組みとして教育が充実していけば、いいなと考えています。

授業別分科会第4分科会（高校・大学）

授業者（谷島久雄）コーディネーター（前田和司）
助言者（東洋孝宏）
運営委員（上野和幸）司会（田中好恵）記録（久



松武夫）

討議の柱「国際交流を通じた人材の育成のあ

り方」

< 授業者から >

- ・ U L コースの留学の準備としての授業を設定する。（留学は3か月）
- ・ 生徒ばかりでなく、保護者も交えた準備として取り組んできた。
- ・ 本時は、ホストスクール決定のための情報収集と交流である。
- ・ ディスカッションの場面、1年生の活動が気付きであるが、上級生の話につられて授業にのめり込んだ。
- ・ 反省として、時間の取り方に工夫が必要であった。
- ・ 大学では国際理解教育としての科はない。
- ・ 留学受け入れの対応をテーマにセッションを持った。
- ・ 大学の交流の実情、短期の受け入れの会を設立、それまではホストファミリーと大学の教官が対応していた。現在はでは学生同士の交流が広がっている。
- ・ 留学生の意見を聞きながら、今後の対応のあり方を考えていきたい。

< 話し合いから >

Q、藤高ではどんな人材を育成しようとしているのか。

- ・ U L コースの目的は、本時指導案 P 5 3 にある。
- ・ 藤高1年、2年の違い

が明らかにあり、2年生の実経験が自信を持って1年生に伝えられ、授業に生きていた。

- ・ 授業では発表場面を多くし、プレゼンの準備など、時間をかけている。

旭川龍谷高、附属中、大学の活動紹介

Q、留学先はどのように調べるのか。準備はどうか。

- ・ 個人情報が多い。（藤高は、準備システムができています。）

Q、日本に住んでいる外国語 ALT に・・・日本語の学習について

- ・ 会話は、日本で生活しながら学ぶ。最初は言葉の壁がある。
- ・ 環境が重要、大学でも毎日学習してきた。
- ・ アメリカ、中国では、対日本語への対応力に根本的に差がある。

Q、コミュニケーションの方法 言葉以外（身振りなど）による障害は？

- ・ おじぎ、礼がわからない。
- ・ アメリカでは譲り合いが多かった。
- ・ 若者留学生は、日本、中国、アメリカほとんど差がない行動をとる。

育成の立場から

- ・ U L は目的が明確であるが、個人の課題は実績のある上級生の生の声で解決意欲が高ま

っている。

- ・留学後は、精神面の成長も大きく、評価の面でも整備していきたい。
- ・留学後3か月頃が大変なので、サポート体制が大切である。
- ・逆カルチャーショック（帰国後）の対応は大きな課題である。事前、本番、事後が整うと留学交流の効果が大きい。

留学先にもどりたいと思う理由

- ・個人差があるが、日本人としてのアイデンティティーが揺らぐ場合もある。

帯広・釧路の交流状況

- ・大学と農業など、現場の連携を進めている。
- ・旭川大会、幼稚園から大学までの公開授業はすばらしい。発音は、幼稚園がすばらしい。中高で発音が悪くなっている。藤高の授業は生徒の輝きがすばらしい。英語以前の方針がしっかりしている。
- ・会話力、発表力が身に付いているのがすばらしい。以上が、ホストファミリーとの交流を意識していることがわかる。
- ・留学生の日本語力はすばらしい。留学生の会が、大学生の自主的な活動から生まれているのがすばらしく大学らしい。
- ・先輩、経験者から学び、伝える方法が効果的、事前の情報提供や収集は大切である。留学後のケアも重要である。

公立校留学情報について

- ・短期留学が多く準備が大変であり、課題である。

留学の配慮事項について（藤高の場合、ほとんど含まれている）

1．保護者への説明 2．留学の目的、心得の指導 3．日本の文化、歴史、伝統を紹介できる力 4．校内交流委員、経験のある先輩の支援活動を組織する。 5．留学先の確かな情報 6．留学計画への助言、教科単位、進学関係 7．ホームルーム指導 8 生徒の心身の状況の把握

帰国後

1．教師間、生徒間の受け入れ態勢 2．教育相談の充実 3．必修科目の履修に配慮 4．学力の補充についての個別指導 5．留学先で身につけた長所の伸長と活用 6．家庭との連絡を密にし、日本での目標・意欲を大切に

大学で

1．留学への悩みなどを作成してはどうか。 2．留学者の追跡調査、報告システムを作れないか。 3．留学生を地域の学校で活用する工夫（ボランティア）

・今大会は、高校、大学が加わり、大変大きな

成果があ



平成15年度

派遣教員研修会及び 帰国教員報告会開催のご案内

毎年、北海道から在外教育施設（日本人学校や補習授業校）に20名ほどの先生方が派遣されています。そして毎年任期を終えられた先生方が帰国されています。その先生方の派遣研修会と帰国報告会を開催します。

今回は、平成15年の3月末に帰国された先生方に現地での教育実践や日本と違った生活面での苦勞等を報告をしていただきながら、研修と交流を深めていただきます。そして引き続き、平成16年度に派遣予定の先生方の研修会を行います。

この帰国報告会、研修会は、決して帰国者・派遣者だけの研修会ではありません。海外で暮らした先生方の生の声が聞ける機会ですので、在外教育施設への派遣を希望されている方、またはただ単に海外の生活のことや教育のことについて興味・関心をもっているという方々にも是非参加していただきたいと思います。各地区でも同じような報告会や研修会が行われているところもありますが、全道から派遣された先生方が集まりますので、いろいろな地域の情報が聞ける機会でもあります。実施要項は下記の通りです。この会報は全道の会員に配付されていますが、お知り合いの先生方にもお知らせ頂いてお誘い合わせの上ご参加いただければと思います。

記

平成15年度 派遣教員研修会及び帰国教員報告会

- 1. 主催 北海道国際理解教育研究協議会
- 2. 後援 北海道教育委員会
- 3. 対象者 平成16年度在外教育施設派遣教員・平成15年度在外教育施設帰国教員
派遣教員の家族・北海道国際理解教育研究協議会会員
海外日本人学校、補習授業校及び海外事情に興味・関心のある教員等
- 4. 日時 平成16年1月9日（土）
13:00～17:00（18:00から激励会あり）
- 5. 場所 ホテル札幌会館
札幌市北区北17条西4丁目 ☎ 011-726-1341
- 6. 日程
13:00 13:35 15:25 17:00 18:00

受付	開 会 式	【全体会】 ・講話	移 動	【帰国報告会】 ・現地での実践 ・協議・交流	【派遣地域別研修会】 ・現地での生活 ・協議・交流	閉 会 式	【激励会】 ・挨拶 ・スピーチ
	13:15		13:45	15:35		17:20	

15年3月に帰国された教員並びに16年度派遣教員の皆さんへの報告会・研修会参加のご案内と出席依頼については、後日改めて各地区の会長を通じて連絡をいたします。是非ご参加くださいますようお願いいたします。

会費納入のお願い

日頃より本会の活動につきまして、深いご理解とご支援をいただき誠にありがとうございます。

本会は皆様の会費によって運営されております。会費は全道大会の運営と研究推進、会の円滑な運営、推進のため、お手数でも滞りなく納入いただきますようお願い申し上げます。

なお、納入状況等につきましての照会は、会計澤田崇までお願い申し上げます。

照会先

事務局会計 澤田 崇（札幌市立幌北小学校）

TEL 011-726-2461 FAX 011-716-0944

北海道国際理解教育研究協議会

年会費3000円

郵便振り込みにてお願いいたします。

振込先 澤田 崇

口座番号 02750-4-3409

通信欄には、氏名、支払い年度、おわかりでしたら会員番号もお書きいただくと幸いです。

ご意見・ご感想・情報をお寄せください

北海道国際理解教育研究協議会

E mail

kokusai@hokkaido.777.ac

道内、国内、海外を問わず情報を事務局までお寄せください。また広報についてのご意見、ご感想もお待ちしております。

各地区における活動状況、実践報告、研究推進、各国の情報等を文書と画像も添付してお送りください。変換後、順次、広報に掲載して参ります。たくさんのお情報をお待ちしております。

発行 北海道国際理解教育研究協議会広報部

会 長 真木 孝輝（札幌市立もみじ台西小学校長）

事務局長 池田 幸一（札幌市立新陵東小学校長）

広報部長 古里 和雄（札幌市立手稲西小学校）

全国大会参加報告・東京大会に参加して

北海道国際理解教育研究協議会 研究部
札幌市立月寒小学校 中村 淳

第30回全国海外子女教育・国際理解教育大会が8月5日(火)6日(水)の2日間にわたって東京で開催された。簡単ではあるが大会について報告をしたい。

1, 大会主題

世界と子どもをひらき, つなぐ教育をめざして

- 地球時代の共生をめざした新たな学びづくり -

東京大会の願い

21世紀の社会的な基調であり, グローバル化の進展しつつある現在, 我々は, 地球時代の共生教育の創出をめざさなければならない。そのためには, 学習から学びへの変革が必要であり, その変革は, 国際理解教育の授業を作るだけでなく, 学校教育自体の変革も含め, より根底的で幅広い分野にわたっておこなわれなければならない。

そして, そのときのキーワードが「ひらかれた学校教育」であり, あらゆる場面でのネットワーク化である。

2, 分科会一覧

	実践事例発表会(一日目午前中)	課題別分科会(二日目午前中)
第一分科会	海外子女教育など	子供たちと今(ひらき・つなぐ子供たちの世界の復興)
第二分科会	帰国子女教育・外国人子女教育	子供たちと「言葉」の学び
第三分科会	国際理解教育(小学校) 中村発表	学校教育をひらき, つなぐ国際理解教育の視点
第四分科会	国際理解教育(中学校)	世界・地域とつなぐ学びとしての国際教育

今年の大会は, 1975年, 1月6日に第1回の全国大会が開催されてから, 30年目という節目の大会にあたる。この30年は, 本会が「海外子女教育」から「国際理解教育」へと日本の教育現場を世界に開くための原動力として働いた30年でもある。

そこで, 国際理解教育が日本の教育の柱となった現状を受け, 本大会は, これから我々がめざす方向性はいかにあるべきか, 新たな国際理解教育の展開を模索する大会となった。

そのため, 会の運営では, あるべき姿を求めるというより, 「実践事例発表会」「課題別分科会」「シンポジウム・世界と子供をひらき, つなぐ教育をめざして」など実践を土台にした意見交流を通して, 国際理解教育の新しい道を共に創りだそうという姿が大切にされていた。

そこで, 話題になったのは, 子供一人一人の学びの姿のあり方である。そして, 学びを「学力」という狭い範囲にとどめようとしている現状に対する憂いである。この大会を通して, 答えをみつけることはできなかった。しかし, 会長が大会挨拶の中で, 紹介したユネスコの示した「学習の4本柱」 Learning to know Learning to do Learning to live with others Learning to be のように, 学びを知識だけにとどまらせるのではなく, 人とのかかわりを通して, 人生を学んでいくことがこれからの国際理解教育では益々求められることについては共通理解ができたように思える。

フォーラム

全道大会は、上川・旭川地区のおかげで本当に実りある会となった。この広報が皆さんの手に渡る頃は各地区の研究大会が開催されているころだろう。1月に実施される冬の学習会では、全道大会を土台に、より前進した各地区の実践をもとに釧路大会へのむけての研究が一層活発化されるものと今から期待が高まる。

さて 総合的な学習の時間の創設、小学校の英語活動の推進など現場における新たな展開の中で、これからの国際理解教育のあり方を問う機運が盛り上がってきたがそのヒントとなるであろう答申が今年の7月だされた。皆さんご存知だとは思いますが、「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」の中間まとめである。ここでは、詳しい説明はしないが、答申では、「キャリア」を「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖」として、またそうした連鎖の中で行われる「自己と働くこととの関係付けや人生における働くことへの価値付け及びその累積」と捉えている。そして、職業観・勤労観をはぐくむ学習プログラムの枠組みを提案している。

このように、子供たちの進路という観点から、教育のあり方を包括的に提言した背景はいったいなんだろうか。自分で意思決定できない、自己肯定感をもてない、そして将来に希望を持つことができない子供たちの現状を憂い、その有効な手立てを教育現場にもとめていることは十分に推察できる。

この答申は、職業的（進路）発達の視点から、教育のあり方を探っているため、一見、国際理解教育とはかけ離れているように思える。しかし、子供の生き方を創造しようという点では大変な共通点もある。とにかく注目すべき答申である。

図書紹介

グローバル教育からの提案

生活指導・総合学習の創造

浅野 誠

編

ディビット・セルビー

日本評論社

「地球市民」という言葉が市民権をえると同時に「グローバル教育」も注目をあびている。しかし、そのあり方はその人の立場によって様々に語られ、グローバリゼーションと混同されることもあった。

この本は、そのような立場とは一線を画し、グローバル教育を人々の生き方を問い、新たな生き方の創造の場として捉えている。また、日本とカナダの研究者たちが共同作業によってグローバル教育のあり方を現場の実践をもとに語ったものである。したがって、グローバル教育を紹介というよりガイドブックとしてすぐに実践に応用できるものである。

「多様性の中の統一」「ウェブ」「競争から協同へ」など、これからの国際理解教育の方向性がとても分かりやすく述べられている。これからの研究と実践には手引きとなる良書だと考える。

(北海道国際理解教育研究協議会 研究部長 中村 淳)